

白井正義作 「暗やみの中から」

<前編>

(効果音) (波の音)

白井正義 (ナレーション) ここは大島。そう、あの三原山やツバキで有名な伊豆大島です。ここが僕のふるさとなんです。僕の名前は白井正義。両親は僕が小さいころに亡くなって、小学校2年の時に、東京の内地に住むおじのところに預けられました。“山谷”って言って、仕事を持っていない人、いわゆる浮浪者の多い地域でした。僕は底で小学校、中学校を過ごしました。けれども、その間ずっと順調だったわけではありません。僕は小さいころに両親を亡くしたせいか、心が少しゆがんでいたようで、人の顔色ばかり伺い、すぐへ理屈をこねる、素直さのない子供でした。でも、どんなに貧しくても、ウソをつくこと、盗むことはしませんでした。それは、ぼんやりとですが、“神様”という存在を感じていたからかもしれません。というのも、何か問題があったときには、いつも必ず不思議に助けの手が入ったからです。例えば、食べるものがないときには、近所の人が親切にしてくれました。

近所のおばさん おや、正義坊、どうしたね、こんなところに座りこくって？ あん？ 何、腹へって動けねえのかあ？ んじゃ上がって飯食ってけ。ほれ、さ、さ。

ナレーション またこんなこともありました。

生徒 A (正義を取り囲んで) きたねえな、お前。

生徒 B このチビ！ おれの盗んだろ！

生徒 C お前しかいねえんだよ！

生徒 A お前に決まったら！

学校の先生 やめなさい！ あなたたち何してるの？ 正義君が盗んだって証拠があるの？ 大勢で寄ってたかって…(FO)

ナレーション 両親がいないってということで、よくいじめられそうになったけど、本当にひどい目には遭っていません。今思うと神様は、僕に目をかけていてくださったんだなあと思います。

僕が、キリスト教というか教会を知ったのは、住んでいた墨田公園に“<sup>あり</sup>蟻の町”というのがあって、その中心に十字架の立った小屋があったんです。それが教会でした。底には貧しい人たちが出入りしていました。(間)

(効果音) (少年正義の乗ったブランコの音)

ナレーション 僕が教会に初めて行ったのは、10歳ごろのことでした。ある日、公園に独りでいると、若くてきれいなお姉さんが声をかけてくれました。

教会のお姉さん  
ナレーション

ねえ君、教会においでよ。きっといいことがありますよ。  
そのころはっぱしの悪ガキだったのに、その優しい声に引かれるように、僕はなぜか逆らいもしないで、ついて行きました。教会では十分に食べさせてもらい、銭湯にも連れていかれて、体をきれいに洗ってもらったことを覚えていません。どんな話をしたのかはまるで覚えていないけど、このお姉さんの明るさとあったかさは、そのまま“教会”のイメージとつながって、僕の心にポツと明かりをともしてくれました。このお姉さんと出会わなかったら、きっと僕は悪の道に入っていたと思います。

中学を卒業してからは、手先の器用さを生かして彫刻を志し、ある先生のところから弟子入りして住み込みの仕事を始めました。朝早くから、廊下や庭の掃除、雑用と忙しく働きましたが、思うほどお金はもらえず、2年でそこを辞めました。それから世話になっていたおじの紹介で、足立区の靴の製造の仕事に就きました。始めは作り方を覚えるのに一生懸命で、興味を持って働きましたが、ある程度分かってしまうと、だんだん仕事がつまらなくなり、人生の根本的なことを考え出すようになりました。自分はこのままでいいのだろうか。自分の生きている意味は一体なんなんだ？何のために自分は存在しているのか。——そうして、超自然的なものにあこがれて、幽霊でもいいから会ってみたいと思って、そんなうわさのあるところへよく行ったものでした。

(音楽)  
ナレーション

(君の悪い感じ)  
墓地に一晩中いたり、人が聞いたらゾッとするようなことも平気でやりました。そう、一度だけ本当にゾットしたことがあります。それは、田舎の土葬の土まじゅうに乗っかって落ちた時でした。しかし一度も幽霊に会うことはありませんでした。自分にとって、幽霊がいれば死後の世界があるということで、それなら来世に希望が持てる、違う自分になれる、そんな考えが頭にあったんですが…。

成人してからも目的が見えずに、むなしい心で、まるで死に場所を探すように、あえて危険なところに行ったり、過激なことをして警察のブラックリストに載るようなこともしていました。25歳のころ、バイクで走っていた時のことです。

(効果音)  
正義モノローグ  
ナレーション

(走行している車の急ブレーキ音)  
危ない、ダメだ、引かれる！  
大型トラックと接触事故です。「これでもう終わり。やっとこれで楽になれる」と目をつむって、自分の死を受け入れようとしていましたが、ふと目を開けると、トラックのタイヤは目の前に止まっていて、かすり傷程度で助かっていたのです。まるで、神様が「お前はまだ死んではならない」と言っているようでした。“偶然に運がよかったのだ”と片付けてしまうこともできずに、こうまで生かされてしまうのでは、何か自分になすべきことがあるのかもしれないと思って、その道を探

しました。いっそのこと信仰心を持ったならと、いろいろな宗教をのぞいてみましたが、どれも納得できるものはありませんでした。

そのころ、足立区の青年向けのサークル“いろはクラブ”に入会していて、そこで加手納真理さんという女性と親しくなりました。彼女は沖縄出身のクリスチャンでした。

加手納真理 白井さんの悩みは、わたしにも覚えがあるわ。それを解決してくださるのはイエス様よ。まず、イエス・キリストを信じることだとわたしは思う。

白井 イエス・キリストって、あの映画「ベン・ハー」に出てきた人？

加手納 あ、そうそう。知ってるじゃない。

白井 まあね。確かにあの映画では、僕、有名な戦車のシーンより、あのイエス・キリストって人のほうが気になったもんねえ。でもさあ、どうして…。(FO)

ナレーション 彼女にそう言われても、信仰の世界のことは、漠然としていてよく分からないまま、なおも捨て鉢な生活が続きました。仕事も、長年続けた靴屋を辞め、転々としました。そんな中で、また大きな事故に遭ってしまいました。栃木県のほうで大型免許を取ってクレーン車で作業をしている時、降りて荷物を移動していると、クレーン車が動いてきたのです。あつと言う間に、塀とクレーン車にサンドイッチにされてしまい、即、病院に運ばれましたが、またも命に別状はなく、腰の打撲だけで済みました。身寄りのない自分だったので、あのサークル仲間の加手納さんに連絡をして、遠いところを来てもらいました。

加手納 白井さん、脅かさないでよ。車とサンドイッチなんて。でもよかった。神様が守ってくださったのね。

ナレーション 数日後、退院して足立区に戻ってから、すぐに電話帳で教会を探しました。一人で行くのは不安だったので、彼女と一緒にしてもらいました。1981年春のことです。

横山牧師 ようこそいらっしゃいました。初めてですか？ まあ気楽にどうぞ。

ナレーション その教会、東京中央バプテスト教会の牧師さんの横山武先生がニコニコ迎えてくれました。教会の暖かい雰囲気にかかれて、度々足を運びながらも、それとは裏腹に、自分自身の強い罪悪感を意識させられ、温かく迎えられれば迎えられるほど、自分の心の中が見透かされているようで、余計に行きづらくなったりしました。そして自分で努力して、もう少し清くなってから再び出直そうなどと考えて、いつしか教会から遠ざかってしまったのです。もちろん、結局は少しも進歩することはなかったのですが…。(間)

1983年10月、20年来の友人から景気のよい話が持ち込まれました。この友人、森川とその知り合い2人の合わせて4人で、靴屋の会社を始めようというものでした。自分も金をためたかったし、親友の森川の持ってきた話でもあったので、信用して加わりました。4人で出資して自分たちの会社ができました。

名づけて「フォーカス」。“4人<sup>フォー</sup>のカス人間”が作ったって語呂合わせで。自分と森川は靴の製造を担当し、会田さんは営業、中山さんが会計兼社長という分担で、会社は動き出しました。長年やってきた靴製造だけれど、自分の会社という意識があると、仕事の取り組みに張りがあって、楽しく感じられました。働けば働くだけ金になる。得意先も増えていき、会社は順調に伸びているかに見えました。ところが、1年たち、2年たつころ、どうも給料の払いがおかしいのに気がつきました。

白井 ちよっと中山さん。もう2年もたっているのに、会計のほうはどうなってるの？  
中山 なんだよ、その言い方。おれがどうこうしてるみたいじゃないか。冗談じゃないぜ。まだ最初の借金が返せてないんだよ。もう少しで終わるから、そしたら給料が倍になるからさ。もう少し待ってくれよな、な？

白井 給料倍か。すげー。よろしくな。  
ナレーション そんな気前のいい話にうまく乗せられて、もうその年も10月が終わろうとしていました。

(効果音) (朝、新聞配達の前転車)

白井 (あくび)あぁ、もう11月か。朝刊、朝刊、今日のニュースは、…と。ふーん“心中”、ヤだね。“借金苦にして… 足立区在住… 中山” え、なんだって？ “靴製造会社「フォーカス」社長中山”！ 心中!?

(効果音) (電話の鳴る音)(受話器を取る音)

白井 はい、白井です。おお、森川。そうなんだ。中山さんが奥さんと心中したって、新聞に。うん。うん。えー、なんだって？ 中山さんが会社の金を使い込んだ!? そんな、僕らの金だろ。会社は、…僕たちはどうなるんだよ!?(多重エコー)

<後編>

(効果音) (読経の音)

ナレーション 僕の名前は白井正義。今やっているこの葬式は、僕を含めて4人で作った靴製造会社フォーカスの社長、中山さんとその奥さんの弔いです。2人は1986年11月1日未明に心中しました。どうして心中なんか、と思いましたが、実は中山さんは、僕らの会社の金を使い込んでいたのです。4人で出資して、借金をして作った会社だったのが、設立して3年たって、順調に売り上げも伸びているのに、いつまでも給料が出ないのでおかしいと思った矢先の出来事でした。なんと中山さんはその使い込んだ金を、キャバレー遊びや何人もの女性につぎ込んでいたということで、本当にはらわたの煮えくり返る思いでした。

中山の母 お集まりくださいました皆さん、息子が大変ご迷惑をおかけいたしました… どうぞお許してください。

ナレーション 葬式のあいさつに立った中山さんのおふくろさんのつらそうな顔を見ては、“骨

つぼをけ飛ばしたい”と思う心もなえてしまいました。

気を取り直して、3人でやっ払いこうと再び会社名を変えて出直しましたが、苦しい状態は変わりません。そうこうして1年が過ぎましたが、どうにもならず、新たに社長になった会田さんが借りた借金でまたまた苦境に立たされました。

白井 もうこれ以上やっ払いけない。おれは降りる。おれの出資した金だけでも返してくれ。

森川 無理だよ、白井。そんな金、今はどこを押してもないさ。それに、会田さんが作った借金は、連名で白井の名前も入ってるんだよ。

白井 なんだっ払い？ そんなの困るよ。知らないところでやり取りした金の保証人になんかなれない。大体森川、元はといえぱお前がおれをこの会社の話に引っ張ったんだぞ。お前を信用して会社を作る金も出したんだ。もう一文なしだよ。どうしてくれるんだ。

森川 白井、すまん。

ナレーション うつむく森川の顔を見ながら、言っ払いいけな思いなながらも、抑え切れずにまくし立てていました。“言っ払いしまった。20年来の友達の心を傷っ払いてしまった”という思いで家に帰ると、一通の手紙が届いていました。親しくしていた加手納真理さんからでした。

白井 やった一、いいタイミングだよ。(手紙を封筒から取り出す。)えーと、「白井さん。お元気ですか？ わたしは沖縄に帰っ払いきて、こちらのペースで仕事をしています。(真理の声に)教会ではイースターの準備が始まっています。白井さんも教会へ入っていますか？

白井モノローグ 教会か。しばらく行っ払いないなあ。

加手納 ところで、喜んではしいことがあります。実はわたし、結婚を考へて祈っている人が入るんです。(FO)

白井モノローグ え、真理さんが結婚？……

ナレーション ダブルパンチでした。心ひそかに真理さんのことを思っ払いていた自分としては、仕事も愛も失っ払いてしまった気分でした。

(効果音) (飛行機の爆音から沖縄民謡のBGM)

ナレーション 1988年3月いっ払いばいで会社を辞めて、4月、“傷心旅行”というとかっこいいですが、真理さんにもう一度会っ払いて気持ちを確かめるために、沖縄へ出っ払いけました。そこには、古い友人や知人もいます。そのうちの一人、村岡さんはクリスチャンでした。

村岡(女) そう、そんなことがあっ払いたの。確かにダブルパンチね、白井さん。でも、神様の知らないところで起こることは何もないのよ。神様はきっ払いと白井さんに何か教へてくださろうとしているんだわ。祈るしかないわね。心にあるまま、飾らっ払いずに、全部神様にお話してごらんないさいよ。ね？



ナレーション 村岡さんのアドバイスは、これまで神様を求め、信じるのに足踏みしていた自分の背中をドンと押してくれる手のようでした。

白井モノローグ 祈る。心にあるまま、ありのまま。…

ナレーション 僕は独りになって、これからのことを考えてみたいと思い、ある南の無人島へ出かけました。だれもない浜辺で、本当に久しぶりで聖書を開き、独り静かに祈りました。

白井(祈り) 神様、この天地とそのすべてをつくられた神様。そしてこの小さいわたしをも心にかけてくださる神様。わたしは今まで、本当に自分中心な生き方をしてきました。この間も、親友を傷つけてしまいました。また、自分の思い通りにならないと気に入らなくて、いらいらしてしまいます。自分はいいい人間だと思ってきましたが、わたしの中にはそうでない自分、人によく見せようとする意地汚いもう一人の自分がいるのです。どこまでも自分が中心で、自分が褒められないと気に入らないのです。神様、それが神様の言う罪であることが分かりました。どうかわたしの罪を赦<sup>ゆる</sup>してください。取ってください。わたしはこの罪に圧倒されそうです。これからのことは神様にお任せします。どうぞ助けてください、神様。

ナレーション その時でした。

(音楽) (神々しい感じ)

ナレーション 不思議な平安が僕を包んだのです。そして、心に声を聞いたのです。

神の声(エコー) わたしについてきなさい。あなたのなすべきことがある。

ナレーション わたしはその時、神様が確かにその場におられることを実感し、イエス様がわたしの罪を今、この場で取り去ってくださったと感じました。

白井(祈り) イエス様…。

ナレーション その晩、宿に帰ると、会社の借金の問題が解決していました。ちょうど浜辺で祈っていたその時間に、森川から宿に電話が入り、自分の名が保証人から外されたとのことでした。

神様は本当に不思議なお方です。今も生きて働いておられます。あの 2000 年前、十字架で死なれたイエス様は、わたしの罪をも背負ってくださった神のみ子、わたしの救い主であることが分かりました。そして主は、今も共にいてくださる！ これまで天涯孤独だった自分が、今こそ、神様を中心にしたクリスチャンの家族に仲間入りできたのです。喜びでいっぱいわたしは、東京へ戻って、すぐに横山牧師先生のところへ行きました。

横山牧師 そうですか。イエス様を救い主と信じたんですね。いやあ白井さん、よかったよかった。白井さんのために 7 年間祈ってきましたよ。「神様のなさることは折にかなって美しい、」と、聖書の言葉のとおりですね。

白井 横山先生は、ずっと祈ってくださったんですか？ よくうちも訪問してくださっ

て。

横山牧師

いやあ、たまに迷惑がられたこともあったけどね。

ナレーション

笑う先生の後ろで、神様も笑っているような気がしました。一匹の迷子の羊を、命をかけて探す神様の愛と、死の谷底から連れ戻すその忍耐。失われた人間が救われるとは、一時の人間的な熱心さではなし得ない神様のお働きです。僕は改めて、自分が救われたことの恵みをひしひしと感じました。

(音楽)

(賛美歌)

ナレーション

1988年6月26日、バプテスマ(先例)式の日です。

横山牧師

白井正義兄弟。あなたはイエス・キリストを神のみ子、主であると信じますか？

白井

はい、信じます。

横山牧師

あなたの信仰告白によって、父、子、聖霊のみ名によりバプテスマを授けま

ナレーション

す。今日から生まれ変わった。もちろんまだまだ聖書のことや神様のことを知り尽くしてはいない。でも、聖書の言葉にあるように、「だれでもキリストのうちにあるなら、新しくつくられた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなった」とあります。今日が、クリスチャンとなった白井正義の誕生日で、スタートです。

教会員

(口々に)「おめでとう、白井さん。」「おめでとう。祈ってたよ。」「よかったね。もう涙出ちゃった。」「本当、おめでとう。」

ナレーション

うれしい一日でした。神様の愛と、教会の人たちの愛に満たされた喜びの日でした。

ところが、次の日――。

白井モノローグ

あいたた、痛！ うー、どうしたんだ？ 胃の辺りがひどく痛む。あーいたたた！ 神様、助けてください。(うなる)

ナレーション

あまりの痛さに、病院に駆け込んだところ、胆のう腫瘍しゅようの疑いがあるとのことで、病院のベッドが空き次第入院し、手術すると言われました。正直言って、喜びのてっぺんから絶望のどん底へドーンと突き落とされた気分でした。

白井(祈り)

神様、どうして!?

ナレーション

次の日曜日、まだ腹痛が収まらないので、教会に欠席の連絡を入れました。

横山牧師

(フィルター音)えー、胆のう炎？ そりゃ痛かったでしょう。もっと早く知らせてくれれば、みんなで祈ったのに。うん、食事だって困ったでしょう。じゃ、ひと言祈ろう。いい？ 「神様、白井さんが、今胆のう炎で…(FO)

ナレーション

横山先生は、自分のために電話の向こうで祈ってくれました。“電話で？”と少し驚きましたが、考えてみれば、電話線を通さないと先生と一緒に祈れないけど、神様とはいつだって祈れるということをお忘れていました。

白井モノローグ そうだ。周りは八方ふさがりのように思えても、必ず上は、神様への道は開かれているんだ。

ナレーション そう思うと、なんとも言えぬ心の平安が与えられました。それから数日後、また不思議なことが起こりました。病院でベッドが空いたので来るようにということで、入院覚悟で診察を受けたところ――

医者 あれ？ ヘンだな。ここに確かあったはずだが…。

白井 先生、どうしたんですか？

医者 いや、この間の腫瘍が見当たらないんだが、ヘンだなあ。

白井 じゃ先生、僕は手術しなくてもいいんですか？

医者 うん。悪くないのに切るわけにもいかんしな。

ナレーション 目の前がパーッと明るくなりました。

(音楽) (軽快な感じ)

ナレーション この話を教会でしたところ――

教会員 (口々に)「え～、ウソー！」「なんだったの、それ？」(笑い)「でも祈りが聞かれたんだよ。」

横山牧師 いやあ、神様は本当に不思議なことをなさる。今も生きて働いておられるんだよ、白井さん。

ナレーション そうです。考えてみれば、小さいころから今日まで、神様が多くの試練を与えてくださったのは、わたしが神様を見だし、さらに神様に深く信頼することができるようになるためだったのです。“すべてを神様にゆだねて生きる。”そのことが少しずつ分かりかけてきたこのごろです。

<完>